

バイエルは京都大学と、同社の研究注力疾患分野において創薬研究候補アーマを探索する包括提携を結んだ。この主体となるのがバイエル・オープンイノベーションセンター（ICJ）。大学との創薬研究連携をさらに発展させ、「現在、特定の化合物がなくとも、大学の先生方が持っているノウハウをバイエルの研究に結びつけることで化合物の発見につなげるなど、パートナーシップを重視して展開している」と高橋俊一ICJセンター長は語る。

創薬研究候補の探索で提携した京大などとオープンイノベーションを推進

製薬企業が大学と共同研究を推進するのは新しい話ではない。大学やベンチャー企業が探索するシーズは重要な創薬リソースだ。安全性の追求などを背景に新薬の研究開発コストは急上昇。1960年代までは10億円で30を超える新薬を市場に送り込めたが、



バイエル ICJセンター長



高橋 俊一 氏

日本発の新薬を世界市場に

「現在ではIを切っていると
思われる」現状を背景に、外
部連携をベースに革新的化合
物の探索や開発を加速する動

きにつながっている。
バイエルは製薬事業におけ
るオープンイノベーションを
世界規模で展開。独ベルリン、

米サンフランシスコ、ホスト
ン、中国・北京、シンガポ
ルに拠点を置き研究機関との
共同研究を展開している。ド

京都大学と包括提携を結んだ。
バイエルは世界的に数十人
規模の専門職をオープンイノ
ベーションにつけており、日

本でも「全員が国内外の大学
などでの研究開発経験を持つ
医学、薬学博士などからなる
専門性の高い6人のチームを
構成。研究の有望性に対す
る目利き部分が「一番大事」と
考え、社内外から人材を集め
た。この専門集団がオープン
イノベーションのエンジンで
ありリーディングエッジだ。
このチームで日本の最先端
の研究に対する理解を深めよ
うとしている。「われわれの仕
事は有望研究を見つけないと
だけではない。共同研究者と
のパートナーシップをマネジメ
ントすること。5年後には
「いくつものパートナーシップ
案件をマネージし、いくつか
は終了しているレベルを持つ
ていきたい。その時には日本
発の化合物が複数、バイエル
のバイブライトの「ついで」
と先を見据える。(松岡克守)

イツがん研究センター（DK FZ）とは5年間で3000万時を投じて新薬の研究に乗り出した。北京では清華大学と3年間の共同研究を行う。インキュベーションラボ、研究助成など「幅広いプロクラム」が同社の連携の特徴だ。こうした動きと連動し、日本では昨年6月にオープンイノベーションセンターを立ち上げた。循環器、腫瘍、血液、婦人科、眼科を研究注力領域とするバイエルのヘルスケア研究開発とのシナジーを求め